

日本計量生物学会

ニュース・レター No.64

1998年7月

目次

巻頭言
会長から一言
日本学術会議の報告
日本計量生物学会1998年度総会報告
1997年度決算報告
1998年度予算(案)
1998年度第1回理事会議事要旨
第6回計量生物セミナーのお知らせ
お知らせ
読者からの声

佐々木 秀雄(旭化成工業)

世の子供達は母親からこう言われる。「折角銀座まで来たんだから隣のデパートのバーゲンを覗いて行くわよ。」

私の妻も、「鬼怒川まで行くんだったら、折角だから霧降高原のニッコウキスゲを見たいわねえ。」と言いつつ、夏の小旅行の計画をたてている。

こういう論旨の展開を「折角理論」という。

最近、広尾方面でも時々使用されることがあるそうだ。使用事例としては、「そこまでやったんだったら、あとは折角理論で、もう一步こまでやるべきだよ。そうすると、とても良い研究になるのに・・・」というのが典型とのことである。

かくいう私も、折角理論の支持者の一人であるつもりだ。

私の場合の実践例は次のケースがもっとも多い。「土曜の休日を返上して折角研究会に出席したんだから、何か発言しよう!」この場合は、「日頃の自分の疑問を一つでも解決しよう」とか、「話の内容の理解し難い点を確認しておこう」とか、「どうも自分の考えと違うので意見を表明しておこう」といった程度のことである。根本は、「黙って帰るのはもったいない」という、いわばケチな根性にあるのだが、「今のは良い質問だ」とか「良い指摘だ」と言われると、つい嬉しくなってしまう。

もう一つの実践例は、「長い時間と多くのお金をかけて臨床試験をするのだから、折角だから何か新しいことをやりましょうよ。」というものだ。試験に参加して下さった患者さんの協力や医師の努力を無駄にしたくない、少しでも試験の感度を上げたいと思うのは当然であるが、同じ仕事をするならやっ

楽しい方がいい、という単純な発想である。

ところで、折角理論の対極にあるのが「横並び方式」である。「みんなも何も言わないから、今日はおとなしくしておこう。」「他の会社も同じようにして上手くいったんだから、それでいいじゃないか。」というのが、この方式の使用事例である。この方式は、かなり厄介な代物で、しかも方式採用者が多いことはさらに厄介である。横並び方式は、新規性のあることや手間のかかることをやらないための、第一の理由となる。その後に、やらない理由が続くのだが、「やらない理由」を探すことは簡単である。考えられるリスク(実際には極めて確率の低そうな)を列挙すれば良いだけである。しかし、それらはいわば後付けの理由(言い訳)であり、本質は安直な「横並び方式」にあることが多いのではないだろうか。

「何もそこまでしなくてもいい」という横並びの考え方が、物事の障害になることは少なくない。立ち向かうには労力を要するが、「折角なのに、もったいない」と思う気持ちだが、案外良い武器となり得るように思える。例えば、

「折角、統計の仕事をやっているなら、線形代数ぐらいは・・・」

「苦勞して論文を読んだ。折角だから、誰かの意見を聞いてみよう。」

「折角、良いアイデアを思いついたんだから、実践してみよう。」

なにやら、全てが自分自身にも当てはまりそうではあるが、皆さんも色々な場面で「折角理論」を試されては如何であろうか?

小さなきっかけで、ほんの少しでも何か新しいことが始まる気がする。

折角理論(せっかくりろん)

会長から一言

吉村 功

5月の大会で、「計量生物学会を医用統計学会としてとらえる傾向があると感じられる」という、やや不満を含めた発言がありました。このような疑問・不満はヨーロッパにもあって、Journal of Agricultural, Biological, and Environmental Statisticsという雑誌を発行する最も大きな動機になっています。つまりBiometrikaやBiometricsが数学と医学に占領された（ひさしを貸して母屋を取られた）から、新しい家を建てようというわけです。

私は、（日本の）計量生物学会では、こういう見方は当たっていないと思っています。確かに医薬関係の発表やセッションは多いのですが、それは現在の日本でその部分に社会的需要と検討課題があることの反映です。個々人のレベルではいろんな誤解があるかもしれませんが、本質的に計量生物学が医用統計学に変質しているということはないと思います。毎年秋に開いている計量生物セミナーでもそのことを学会として十分配慮していると思います。

5月の大会では「学会発表は個人の意見・見解でなければならない」という発言もありました。私はそう思いません。実際、グループ研究の成果は、合意した内容で発表するのが普通ですし、特別な企画であれば公式見解的なものも議論の土台として報告が必要になります。そういうものの価値を判断するときに個人が自己の主体性を発揮することが、学会という組織、あるいは学者・研究者という立場で重要だと思います。

可能な限り多様性を認め、発言の自由を確保していきたいと考えています。

日本学術会議の報告

1998年4月20日

第4部会員、統計学研究連絡委員会担当 吉村功

1. 統計研連の報告

学術会議全体のことより、統計学研究連絡委員

会（統計研連）の方が、各学会会員との関係が直接的だと考え、これに関することを先に報告します。

第2回の委員会を3月10日に開きました。一部の方にはメール等で噂が流れていた、統計数理研究所の将来計画のことをまず議論しました。これについて関係者が得ている情報を出し合った後に、研究所の外部の統計学研究者、とりわけ関連学会の役員の意見を出してもらいました。

清水良一所長の話では、一つは行政改革の一環としての国立研究機関を見直すこと、もう一つは情報学に関連した研究所を新たに作ることで、この両面に関連して、過去に統計数理研究所が出していた将来計画の見直しが必要となった。すなわち、昨年度に認められた増員等の延長としての拡充が今年度は認められなかった。さらに現在の統計数理研究所が日本の統計学研究の共同利用研究所として本当に機能しているか、という疑問が研究所に投げかけられた。3月13日には文部省から係官が来所するので、これらについて説明をする予定である。その動きが即研究所の廃止といった風な危機感で一部の所員に受け止められたようである、ということでした。

統計数理研究所ではすでに、現状評価と将来構想を考える二つの作業部会で問題に対応しており、内部あるいは外部からの批判をそこで取り入れようとしていることなども、関係している委員等から報告されました。大学共同機関としての実績と将来方針が社会に十分認められるように工夫したい、という内容の意見表明もなされました。（この方向でその後の動きが進んでいるものと思われる。）

清水所長が退席された後の討論では、「このような動きが即研究所の再編になるというのは、先走りすぎであろうが、研究所が現在共同利用研究所として十分機能しているかどうか、いわゆるセンター・オブ・エクセレンスになっているかどうかについては、確かに外部の研究者に批判や不満がある。統計学科とか、統計家養成組織が大学等に無い日本では、統計数理研究所が研究と教育のセンターとして非常に重要であるのに、そういう自意識が所全体としては希薄なのではないか、」といった厳しい意見も出されました。

この他に研連で議論されたことを簡単に述べま

すと、①ISI本部から、Annual Reportに日本人で統計学の発展に寄与した人物として田口玄一氏を載せたい、と言って来たのにたいし、賛意を表して必要なら紹介文も用意する、②本研連の対象領域を文部省科学研究費補助金の分科細目での「統計科学」のキーワードを主として考える、③クローン人間等についての学術会議からの意見聴取については、理解可能な範囲でのみ対応する、」などです。次回研連は7月頃に開催しますので、もし活動について意見等がありましたら、身近な研連委員にお伝え下さい。

2. 学術会議の報告

学術会議は7部からなっています。その部会での審議が2月12, 13日に行われました。私が属している第4部は理学です。それぞれの分野からの要望、各種の賞に対する候補者の推薦、国際会議への派遣者の決定、研連の見直しといったことが議論されました。その後、3月24日に、理学系の研連、専門委員会の連絡会議がありました。理学の多様性によって研連の領域を定めるのは難しいことが、議論の中で浮き彫りになったように感じました。

以上が現時点の報告です。次の学術会議総会は4月21日から24日にかけて行われます。

日本計量生物学会1998年度総会報告

総会参加者数37名、また委任状提出者が計120名で総会は成立が確認された。(1998年2月現在の本学会正会員数は351名であり、会則第19条1項より71名以上の参加で総会は成立。)

最初に吉村会長から、途上国援助にぜひご協力いただきたいと挨拶があった。

1. 1997年度活動報告

佐藤(俊)庶務担当理事が報告。

1997年4月25, 26日に東京大学農学生命科学研究科において、日本計量生物学会・応用統計学会合同年次大会を開催した。10月3, 4日には富士教育研修所において第5回計量生物セミナーを開催した(臨床の部のテーマ「中間解析」、生物のテーマ「保全生物学をめぐる最近の話題」)。

また、10月30, 31日に開催された応用統計学会

シンポジウム「ベイズ統計学の最近の発展と応用」を協賛した。

雑誌「計量生物学」は1996年第17巻増補を発行し、ニュース・レターはNo.58-61を発行した。

1997年度は理事会を6回開催し、応用統計学会との統計関連連合大会実行委員会を4回、合同年次大会のプロクラム編成作業委員会を1回開催した。

2. 1997年決算報告、会計監査報告

佐藤(喬)会計担当理事から、別紙決算報告にもとづいて収支の報告があった。続いて山口監事より、1998年4月13日に会計監査を行い、決算報告通りであったことが述べられ、拍手によりこれを承認した。

3. 1998年予算案

佐藤(喬)会計担当理事から、別紙予算(案)にもとづいて説明があった。拍手により承認された。

4. 会則の変更について

本学会の会員に「名誉会員」新設と、事務局の設置場所について、総会の開催時期について、の3点の変更案が出され、佐藤(俊)庶務担当理事から説明があった。

3点ともに拍手により承認された。

5. 1998年活動予定

佐藤(俊)庶務担当理事から、本年度の活動予定が述べられた。

1998年度合同年次大会の開催(5月12, 13日, 中央大学駿河台会館)、また今回は日本計算機統計学会の協賛をいただいた(5月14, 15日の日本計算機統計学会大会を協賛)。10月16, 17日に富士教育研修所にて第6回計量生物セミナーを開催予定。

1998年12月に開催されるケープタウンでのIBC98へ、途上国からの参加者のための旅費援助として3000ドルを寄付する。

雑誌「計量生物学」は、1997年第18巻、1998年第19巻を刊行予定。ニュース・レターはNo.62-65を刊行予定。

10月には1999-2000年の理事選挙を予定。

その他、会場から「環境問題も含めて、計量生物学が重要であることが分かるような活動をしていただきたい」という要望があった。

1997年度決算報告

(1997年1月1日～1997年12月31日)

[単位：円]

収入の部

項目	予算額	収入	
・会費収入	2,526,425	2,370,000	
A会員		(266,000)	4,500 x 62
B会員		(2,074,000)	10,000 x 209
C会員		(30,000)	5,000 x 7
・賛助会員	884,000	110,000	
・会費未収金	259,350	919,000	
・会費前納金	0	100,000	
・統計関連連合	0	100,000	年会開催費返金
・Journal売上げ	0	66,000	
・年会予稿集売上	0	0	
・雑収入	0	701	
・前年度繰越金*	425,221	325,221	年会開催費返金
合計	4,094,996	3,990,922	

*97年前納金¥117,500を含みます。

支出の部

項目	予算額	支出	
・本部送金	1,602,900	1,517,823	
・印刷費	780,000	684,962	
Journal	(400,000)	424,462	
コンピュータ	(380,000)	260,500	
・人件費	600,000	500,000	
・通信費	450,000	259,742	
・会議費	200,000	172,135	
・年会開催費	0	0	
・消耗品費	40,000	44,232	
・雑費	10,000	22,443	
・予備費	412,096	0	
・次年度繰越金*	0	789,585	
銀行		722,618	
郵便		62,000	
現金		4,967	
合計	4,094,996	3,990,922	

*98年度会費前納金 ¥100,000.- を含みます。

本部送金 正会員：\$45.0 学生会員：\$15.0

特別会費

項目	予算額	実績	
前年度繰越金	86,250	86,250	
会費収入	120,000	112,730	
収入計	206,250	198,980	
特別事業へ返却	206,250	0	
96年度特別事業から借受け	320,500	320,500	
今年度特別事業へ返却	206,250	0	
次年度繰越し借受け	114,250	320,500	

特別事業 第5回計量生物セミナー

・前年度繰越金	1,282,559	
・参加費	2,640,000	
・昼食代	132,000	
・雑収入	10,000	駒澤氏より寄付
・銀行利息	627	
収入合計	4,065,186	
・第4回テークおとし	627,020	
・第4回ダビング代	7,650	
・第4回写真代	4,858	
・研修所払い	1,626,995	
・講師交通費	190,000	
・ナイトセッション	35,422	
・人件費	55,000	
・佐川急便	2,600	
・郵送料	16,120	
・雑費	1,574	
・次年度繰越金	1,497,947	
銀行	(1,170,718)	
現金	(6,729)	
特別会費本部送金立替	(320,500)	I B C \$3,000
支出合計	4,065,186	

会計監査報告

日本計量生物学会 殿

1997年1月1日より12月31日までの会計経理を監査した結果、会計報告の通り相違ないことを認めます。

1998年 4月 13 日

監事 後藤昌司
山口直人

日本計量生物学会1998年度予算(案)

(1998年1月1日～1998年12月31日)

[単位:円]

収入の部

項目	予算額	前年度予算額	前年度実績	
・会費収入	2,370,000	2,526,425	2,370,000	
A会員				((4,500 x 75 + 10,000 x 269 + 5,000 x 7) - 100,000) * 0.8
B会員				
C会員				
・賛助会員	400,000	884,000	110,000	
・会費未収金	296,250	259,350	919,000	
・会費前納金	0	0	100,000	
・統計関連連合	0	0	100,000	年会開催費返金
・Journal売上げ	0	0	66,000	
・年会予稿集売	0	0	0	
・雑収入	0	0	701	
・前年度繰越金*	789,585	425,221	325,221	年会開催費返金
合計	3,855,835	4,094,996	3,990,922	

*98年前納金¥100,000を含みます。

支出の部

項目	予算額	前年度予算額	前年度実績	
・本部送金	1,763,970	1,602,900	1,517,823	\$1.0 = ¥130
・印刷費	700,000	780,000	684,962	
Journal		(400,000)	424,462	
ニュースター		(380,000)	260,500	
・人件費	500,000	500,000	500,000	
・通信費	300,000	450,000	259,742	
・会費	200,000	200,000	172,135	
・年会開催費	0	0	0	
・消耗品費	45,000	40,000	44,232	
・雑費	25,000	10,000	22,443	
・予備費	321,865	412,096	0	
・次年度繰越金*	0	0	789,585	
合計	3,855,835	4,094,996	3,990,922	

本部送金

正会員：\$50.0 学生会員：\$17.0

特別会費

項目		前年度予算額	前年度実績	
前年度繰越金	198,980	86,250	86,250	
会費収入	121,520	120,000	112,730	
収入計	320,500	206,250	198,980	
特別事業へ返却	320,500	206,250	0	
1998途上国援助	\$3,000			特別事業より借受け予定

1998年度会費および会員数(1998年2月1日現在)

A会員	(雑誌Biometricsを購読しない正会員)	4,500円	75名
B会員	(雑誌Biometricsを購読する正会員)	10,000円	269名
C会員	(雑誌Biometricsを購読する学生会員)	5,000円	7名
		合計	351名

賛助会員

14社

1998年日本計量生物学会第1回 理事会議事要旨

日 時：1998年3月10日（火）18：00～20：45

場 所：統計数理研究所特別会議室

出席者：岩崎，魚井，鶴飼，大瀧，大橋，駒澤，
佐々木，佐藤（喬），佐藤（俊），高木，
丹後，椿，三中，柳川，吉村 各理事
栗原 事務局

1. 前回議事要旨の確認

前回議事要旨が承認された。

2. 前回審議事項のフォローアップ

IBS Award Fund CommitteeからIBC98での途上国援助（3000ドル）について、今後の本部との送金等のやりとりは、佐藤（喬）会計理事を通じて行う。

柳川理事から、1月24日九州大学でシンポジウムを開催し、IBS会長Sue Wilsonさんとの交流を深めた、との報告があった。

3. 庶務理事からの報告

学協会著作権協議会より、平成7年度複写料として40,179円が振り込まれた。

John Wiley & Sons Japanから広告掲載について1月9日に問い合わせがあった。佐藤（喬）会計理事と連絡を取り、暫定的な料金を伝えたところ、できれば書籍の広告は別料金にしてほしいという回答であった。

会長宛てにIBC2000（UCバークリー）のプログラム委員推薦依頼があり、佐藤（俊）理事を推薦した。

Biometric Bulletinエディターに、年会アブストラクト掲載分量について確認したところ、「題名、発表者名を含めて200ワード以内」であった。

ジャミックジャーナルから、年会日程のほかに年会内容も掲載すると連絡があり、対応することとした（連絡委員会の了承も得ている）。

昨年の年会英文タイトルは、ただちにBulletinに送ることです承した。

4. 1997年決算報告

佐藤（喬）会計理事より昨年度の決算が報告された。監査結果と1998年度予算案は作成し次第各

理事に送付し、書面にて審議することとした。

5. 臨床試験に携わる（企業内）統計家の資格化について

標記の議題について大橋理事から説明があった。中立性を考えると当学会のようなアカデミックな組織が実施すべき、「資格化」について議論するワーキンググループを作る、という提案があった。大橋理事を座長としてワーキンググループを作ることが了承された。メンバーは、大橋，魚井，佐々木，佐藤（俊），吉村各理事のほか、佐久間昭氏ほかにも参加をお願いする。

6. 1998年度合同年次大会について（1998年5月12日，13日）

プログラム編成作業委員長の岩崎理事より、昨日開催された連絡委員会で決まったプログラム案が報告された。

総会の議題としては、1997年事業報告，1997年決算報告・監査報告，1998年事業予定，1998年予算案，会則の変更とし、これらをニュース・レターに掲載する。会員にはニュース・レターと一緒に委任状を印刷したはがきを送付する。その際、郵便番号の変更にともない、会員の連絡先住所を確認する（連絡先住所とe-mail住所）。

7. 第6回計量生物セミナー

昨年に引き続き企画は臨床の部大橋理事，生物の部三中理事をお願いする。次回の理事会にセミナー案を出してもらう。

8. 各理事からの報告

高木渉外担当理事から、会則変更案が提出された。議論の結果、会費は現行通り会則に残し、名誉会員の会費に関する事項を追加することにした。会則変更案はニュース・レターに掲載する。

ニュース・レター広告掲載料：当初の案が高すぎるということと広告料金の取り扱いについて議論があった。広告料はすべて途上国援助の目的に使うこととし、そのため料金を低く設定し、1ページ3万円，1/2ページ2万円，1/4ページ1万円とした。次号のニュース・レターに「次号から広告欄を設けます」というおしらせを掲載する。

9. その他

統計数理研究所からの依頼：統数研所長から会長宛てに、統数研の今後のあり方について意見を伺いたいと依頼があった。学会としてではなく、会長個人の意見を送ることです承した。

統計関連学会の共通事務局を統計数理研究所に置くことは、スペースの問題から無理があるようである。この件については、次回の理事会までに案を出して検討することとした。

次回は5月12日大会当日、会場で開催予定。

記録 佐藤俊哉 庶務担当理事

第6回計量生物セミナーのお知らせ

日時：1998年10月16日（金）午後～17日（土）正午
場所：富士教育研修所（静岡県裾野市下和田656番地）

会費：臨床の部35,000円（アカデミック割引20,000円）、生物の部20,000円、ただし、資料代、宿泊費、夕食・朝食、雑誌計量生物学（講演報告集）を含む

申込締め切り：9月18日（金）（臨床の部は先着100名、生物の部は先着50名まで）

（臨床の部）

テーマ：ICH-E9ガイドライン－臨床試験のための統計的原則－を巡って

セミナー担当理事 大橋靖雄（東京大学医学部）
趣意：

今回のセミナーでは、ICHでのE9トピックである「臨床試験のための統計的原則」を取り上げ、集中的な討議を行う。本ガイドラインは、ICHでの議論を終了し（Step 4）、現在日本語訳とQ & Aが作成されつつある。以下のようなテーマを中心に、ガイドライン策定に携わったEWGメンバーによる議論の紹介、企業統計家あるいは開発担当者の解釈と問題提起、アカデミアあるいは規制当局の統計家の見解、全体の討論という形式で議論を行いたい。

テーマ案：

・エンドポイント

信頼性と妥当性の評価、代替エンドポイントと多重エンドポイント、有用性

・検定方法と有意水準

片側5%は許されるか、同等範囲の設定、非劣性試験と解析対象集団

・施設の問題

施設をどう定義するか、交互作用の解析と解

釈、交互作用存在下での効果の推定

・試験統計家のqualification

・試験統計家の要件、教育プログラム、認定の方法

・症例検討会はなくなるのか？

データの取り扱いに関するプロトコルへの記載、盲検下再検討、調整医師の役割

（生物の部）

テーマ：生物形態測定学の最前線－「かたち」を見る数理のまなざし－

オーガナイザー：

三中 信宏（農林水産省農業環境技術研究所）

岸野 洋久（東京大学教養学部）

趣意：

生物の「形態」から得られる情報は、生物学の基礎的研究から応用にいたるまで、さまざまな状況で必要とされている。しかし、生物形態を「定量化」する試みは、古くはD'Arcy W. Thompsonの“On growth and form”（1917）やJulian Huxleyの“Problems of relative growth”（1932）に見られるように、科学史の上で印象的な研究例をいくつも残してきた。しかし、実用に耐えうる定量的形態解析の理論が生物学者の手に届くようになったのは、実は最近のことである。生物形態の定量的理解のためには、多変量統計学と変換幾何学などの数理科学と生物学との接点領域を積極的に広げていく必要がある。今回のセミナーでは、進展著しい生物形態測定学の理論と実践をよりよく理解することをめざし、さまざまな生物形態の解析例を通じて、新たな「かたちの学」のフロントを形作るための議論の場を設けたいと考える。なお、コンピューターを用いたデモンストラーションを予定している。

現時点で確定している演者と演題：

三中 信宏（農林水産省農業環境技術研究所計測情報科）

「幾何学的形態測定学の足跡－統計学・数学・生物学の交わりの中で」

岩田 洋佳（東京大学大学院農学生命科学研究科）

「楕円フーリエ記述子に基づく植物形態の統計遺伝学的解析」

田辺 力（徳島県立博物館）

「薄板スプラインを用いたヤスデ個体群の交尾器変異」

坂巻 祥孝 (北海道大学大学院農学研究科)

「微小鱗翅目昆虫の翅形解析とバイオメカニクス」

河内まき子・持丸正明 (工業技術院生命工学工業技術研究所形態機能研究室)

「3次元形態変換法に基づく人体の形状分類」

立田 晴記 (東京大学大学院農学生命科学研究科)

「多変量形態測定学に基づくサッポロフキバツタ個体群の地理的変異解析」

宮ノ下 明大 (東京大学大学院農学生命科学研究科)

「スギマルカイガラムシのホストレースと地理的変異－形態と分子による解析」

大野 豪 (北海道大学大学院農学研究科)

「ウスジロキノメイガの形態変異パターンの分析－地理統計学的観点から」

小松 正 (北海道大学大学院地球環境科学研究科)

「量的遺伝学に基づく形態変異の解析」

関連学会等のお知らせ (1998年8月—1998年12月)

- 1998年8月4-14日 St. Andrews, Scotland, UK

Three International Workshops on Wildlife Population Assessment

1. Design and Analysis of Distance Surveys
2. Survival Estimation from Data on Populations of Marked Animals
3. Latest Developments in Distance Sampling

連絡先: e-mail: steve@mcs.st-and.ac.uk

- 1998年8月9日-13日 Dallas, USA

1998 Joint Statistical Meeting sponsored by ASA, ENAR, and WNAR

連絡先: FAX 703 684 1221

e-mail: meetings@asa.mhs.compuserve.com

- 1998年8月24日-28日 Dundee, Scotland, UK

The 19th Conference of the International Society for Clinical Biostatistics

連絡先: FAX 44 1382 308877

e-mail: a.lawson@tay.ac.uk

- 1998年8月24日-28日 Bristol, UK

COMPSTAT '98

連絡先: FAX 44 1582 760981

e-mail: compstat-98@bristol.ac.uk

- 1998年9月7日-11日 Glasgow, UK

The 1998 Royal Statistical Society Conference (RSS98)

連絡先: FAX 44 (0) 141 552 2079

e-mail: rss98@stam.strath.ac.uk

- 1998年12月13日-18日 Cape Town, South Africa

International Biometric Conference '98 (IBC '98)

連絡先: FAX 27 21 689 7578

e-mail: IBC98@maths.uct.ac.za

その他、関連学会・会議・セミナーなどございましたら、ニュースレター編集委員までお知らせ下さい。

会計理事からのお知らせ

1998年度の会費の納入をお願いいたします。本学会の会計年度は国際計量生物学会の会計年度に合わせて1-12月です。B会員およびC会員で、会費を1年間未納にした会員は規定に従い雑誌Biometricsが届かなくなります。詳しくは、ニュース・レターNo.48巻頭言をご覧ください。

会費	1998年度
A会員	4,500円
B会員	10,000円
C会員	5,000円
開発途上国援助のための特別会費	2,000円

特別会費に賛同される方は、A、B、C会員会費に2,000円を上乗せして下さい。

A会員: Biometricsを購読しない正会員

B会員: Biometricsを購読する正会員

C会員: 学生会員 (Biometricsを購読する)

郵便振替口座：

00150-2-22365 日本計量生物学会

銀行振込口座：

第一勧業銀行 飯田橋支店

普通 061-1499027

日本計量生物学会

または、

三和銀行 飯田橋支店

普通 624-3596166

日本計量生物学会

事務局からのお知らせ

銀行振込で会費を納入していただく場合、機関名が長いと会員名が切れてしまい、どなたからのお振り込みか、事務局では分からなくなることがあります。銀行振込の際には、必ず会員名を先頭にしてください。

学会への連絡、問い合わせ等は手紙またはFAXで下記事務局までお願いします。また、所属、連絡先等に変更のあった会員の方は、事務局までご一報下さい。

読者からの声

No.60の巻頭言についての疑問

高千穂商科大学 渋谷政昭

巻頭言という短い文章のなかで、会員にたいして何を伝えようとしているのか理解できません。

1. 表題の意味が分かりません。
2. 臨床試験のガイドラインが、どうして経済的政治的でないのでしょうか。当然、あい対立する利害がからむ問題であり、したがって国際「調和」会議が開かれているのではないのでしょうか。魚井さんに患者としての私の利害を守っていただくことを期待できないのでしょうか。
3. 「当方の不甲斐なさ…」 「当方の語学力の欠如…」 の「当方」とは、魚井さんご自身のことでしょうか、日本人一般のことでしょうか。「ヨーロッパの人たちが嫌いになった」「全身怒り」とはご自身のことでしょう。ニュースで個人的なグチをこぼされることは会員としては迷惑です。また学会のニュース上で、単

にヨーロッパ人全体を明確な理由を述べずに非難することは反対です。「大東亜戦争」という言葉をこのような文脈で使用することも反対です。

4. 「公憤」を訴えたいならば、少しでも事実を客観的に記録していただきたい。
5. 巻頭言の後半が主題であり、「日本人が最大の障害」であるならば、「日本計量生物学会」の日本人にたいして国際会議上の問題点を、簡潔に紹介して下さい。
6. 魚井さんがヨーロッパ人と日本人のどちらを嫌っているのかもこの文では分かりません。

No.60の巻頭言についての疑問にお答えして

山之内製薬 魚井 徹

渋谷先生の御叱責に関しまして、ニュースレターでは限られた紙面の中で意図を伝えようとするために、説明・引用が不足しており一部意味不明な部分がありましたことはお詫び致します。

巻頭言で伝えたかったことは、

①医薬品の国際調和の会議（ICH）が必ずしも科学的な議論を中心として行われるのではなく、経済的な配慮が先立って科学性が損なわれることもみられ、調和されたガイドラインを批判的に読むことも重要であること。

②ICHの議論の中では、ヨーロッパからの委員は他の地域からの委員間で未だ議論が継続中であるにもかかわらず、政治折衝に走る傾向が往々にして見られたこと（私の周辺の日本人では同様の見方をする方は多いようです）。

③言い古されたことであるが、一般的傾向として日本人の発言・主張が少ないこと。

④この原因の一部には言語的な障害もあり、海外の委員を説得するといった訓練も受けていないことが考えられること。

⑤これも言い古されたことではあるが、日本人は不明な事柄について確認せず、あるいは、自分の主張が理解されるまで話さずに、あいまいな状態で承諾してしまう場合が多いこと。

等です。このように、特に目新しいことで特筆に値することを述べたいということではなく、それを違った角度から表現しようとするために楽屋落ち的な部分があり、ご叱責を賜ったものと考えます。今後は計量生物学会の巻頭言ではその種の

冗談は致しません。

蛇足ですが、製薬業界は既に国際化の時代ではなく、ワールドワイドに一つの市場であると考えて行動すべき時になってきています。このような時代にあっては、日本人はより活発に国際的な場で活動すべきであり、そのための実行可能な具体的方策が必要であると考えます。

編集後記

本号では、5月に行われた1998年度総会の報告、第6回計量生物セミナーのお知らせが載っています。計量生物セミナーは、臨床の部、生物の部とも人数に限りがありますので、早めの申込みをお勧めします。また、ニュースレターNo.60の巻頭言への読者からの意見と、それに対する回答を載せました。この意見は、No.60発刊直後にいただいたものですが、巻頭言著者の回答も同時に掲載したほうが良いと考えたため、ニュースレターへ

の掲載が随分と遅くなり、申し訳けありません。

学会の各委員会からの連絡などのほか、会員相互の情報交換も、ニュースレターの重要な役割と考えて、ニュースレターを編集しています。これからも、記事に対するご意見や、会員に役立つだろうと思われる情報は、ニュースレター編集委員会までお送りいただければ、読者からの声の欄などで掲載してゆきたいと思います。巻頭言も含め、掲載している記事の内容は、個人の立場での意見も含まれています。編集委員会が各記事を査読して、採否を決定したり修正したりすることは行っていない。今までもそのような記事はなかったものと思いますが、個人攻撃に類する記事や、広告は別として営利目的の記事（本号から有料で広告を掲載することになりました）でなければ、会員からの情報は極力制限を設けず掲載してゆく方針です。今後も、会員各位のニュースレターへのご協力をお願いします。

（赤城山から）

日本計量生物学会事務局

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

統計数理研究所佐藤研究室内

FAX 03 (3446) 1695

栗原恵美子

編集委員会 林 邦彦, 橋本修二

〒371-8514 群馬県前橋市昭和町3-39-15

群馬大学医学部保健学科医療基礎学

林邦彦

FAX 027 (220) 8999

e-mail khayashi@news.sb.gunma-u.ac.jp